

当面（の間）

東 日本大震災から1年半になる。時間がたつのが速いと感じる人も遅いと感じる人もいるだろう。

将来の時間を表すことばに「当面」「当分」がある。「当分の間」とも言う。これに加えて去年は「当面の間」ということばを見聞きすることが多かった。

朝日、毎日、読売、産経の全国紙4紙と共同通信の記事を検索したところ、去年1年間に使われた「当面の間」はあわせて538件で、おとしの214件の2.5倍である。2009年342件、2008年259件、2007年237件で、去年の数字が突出して多い。特に際立っているのが被災地の新聞だ。福島民報（去年71件、おとし2件、09年6件）、河北新報（去年51件、おとし3件、09年4件）、岩手日報（去年28件、おとし7件、09年15件）となっている。明らかに震災・原発事故の影響で増えている。

「当面の間」は、『「当分の間」と『当面』の混交表現で誤用だ』、「いや誤用とは言えない」という両方の意見がある。

去年のNHKニュース原稿の使用例を見た。「堆肥や腐葉土について、当面の間、販売や使用を自粛するよう要請しました」「〇〇県内のすべての漁協は、当面の間、〇〇漁を中止することを決めました」「取り除いた土を当面の間、校庭の一角に保管することになりました」などがある。

このころの省庁や自治体などの文書にも「当面の間」が多く登場する。たとえば、厚生労働省、経済産業省、環境省の連名による去年5月の文書に「避難区域及び計画的避難区域の災害廃棄物については、当面の間、移動及び処分は行わない」という文がある。また、計画停電に関連し、金融機関のお知らせには「当面の間、ATMコーナーの営業時間を短縮します」という表現がたびたび登場した。いつまで続くか、現時点では判断できないという戸惑いがにじむ。

「当面」は「今のところ」、「さしあたり」という意味を含む。「当面、問題はなさそうだ」「当面、人員は足りている」といった使い方をする。一方、「当分」「当分の間」は「当分、家へは帰れない」「当分の間、入院することになった」のようにある程度長い時間がかかる場合に用いられる。

原発事故対応、がれきの受け入れ、高台移転などを考えると、「当面」の間では解決できない問題が多い。そこで、「当面」より長く、「当分」より短い印象を与える「当面の間」が多用されたのではないだろうか。

しかし、震災から1年半がたつ。「当面の間」「当分」「当分の間」はいつまでも使い続けられない。被災地の人たちは、「忘れられることが怖い」と言う。目標時期をあいまいにすることは忘却につながる。復旧・復興の進捗しんちよくや暮らしの再建に関心を持ち続けよう、と自戒も込めて思う。 吉沢 信（よしざわ まこと）